

**お米育ちの“、卵、牛乳、鶏・豚・牛肉、加工肉、ケーキ”が勢揃い！**  
= 飼料米を活かす日本型循環畜産実践交流の集いです。 =

・とき 2010年3月12日 金 午前10時~午後5時半

・ところ 江東区文化センターホール

(地下鉄東西線東陽町駅徒歩5分、東京都江東区東陽 4-11-3 TEL03-3644-8111 )

案内図は裏面をご参照下さい。

お米育ちの「鶏卵、牛乳、鶏・豚・牛肉、やハム・ソーセージ」を試食し、飼料米を活かす日本型循環畜産・酪農の実践報告を聞き、その素晴らしさを語り合う集いです。

**催しの内容**

**第1部：11時~13時**

お米育ちの卵、鶏・豚・牛肉、牛乳の試食・試飲、飼料米の生産・給餌・普及活動を紹介する展示を行ないます。

試食コーナーでは米国産トウモロコシ育ちの畜産酪農製品との食味比べもあります。

超多収飼料米の生産活動紹介展示 飼料米を給餌する畜産・酪農生産活動紹介展示

稲作農家と畜産農家が協同する循環型地域農業の紹介

飼料米育ちの家畜が健康に育つ訳とその家畜の肉や卵が健康志向な訳を説明する展示

( 粕米給餌の優位性やオレイン酸やグルタミン成分の増加特性等の説明 )

飼料米育ちの畜産酪農製品を普及する消費者の活動紹介展示

生協が進めている日本型循環畜産支援の活動紹介展示

**第2部：13時~17時半**

飼料米を活かす日本型循環畜産確立を目指して生産者、消費者、研究者が報告し、会場の参加者も含めた討論を行います。

・主催者挨拶 超多収穫米普及連絡会共同代表、日本草地畜産種子協会

・基調講演 「飼料米を活かす日本型循環畜産が日本の農業を再生させる」

東京農業大学農学部 信岡 誠治 准教授

**(13:50~)**

・実践報告 超多収飼料米生産者 矢野 匡則 氏 (香川県観音寺市)

飼料米給餌養鶏生産者 鈴木 明久 氏 (大分県日出町)

飼料米配合飼料メーカー 多田井 友揮 氏 (昭和産業)

日本型循環畜産支援生協

**(15:05~)**

パネル討論 コーディネーター：NHK解説委員 合瀬 宏毅 氏 (予定)

パネラー 全国消費者団体連絡会代表 (予定、交渉中)

日本鶏卵生産者協会 緒方 忠浩 会長代理

全国養豚生産者協議会代表ないしは超多収飼料米生産者代表

東京農業大学農学部 信岡 誠治 准教授

農林水産省 山田 正彦 副大臣 (予定)

農研機構研究者ないしは農水省生産局代表

**17:20 閉会挨拶**

農林水産省 山田 正彦 副大臣 (予定)

**17:30 閉会**

畜産発酵堆肥で育った飼料米が日本の畜産と農業を変え、食料自給率と食の安全を向上させます。その上循環型地域農業への転換で農業地域の環境を保全し、CO2削減にも貢献するのです。

この関係図を図面で表現して表頁右を構成します。

米国産トウモロコシのバイオエタノール需要の増大による高騰以来の高値傾向が続く中で飼料米の増産が続き、2010年度は前年のほぼ10倍の4万ha以上の作付が見込まれます！！

食料自給率を  
3～5%引き上げ  
(減反水田の90%で作付)

農業地域経済の  
振興に貢献  
毎年5000億円～  
6000億円が還流

= 稲作農家と畜産農家が協同して  
畜産堆肥で育てる =  
飼料米が  
日本型循環畜産を切り拓く！！

殺虫・殺菌農薬0  
で多収穫を実現  
家畜の健康増進と  
食の安全性向上で  
日本型食文化  
の充実に貢献

循環型地域農業の推進  
で地域の環境を保全  
畜産堆肥の水田への  
投入はCO2削減に  
も貢献

## 裏頁

### 飼料米を活かす日本型循環畜産を消費者も強く支持する理由

- 1、飼料価値としての優位性が高い。畜産の配合飼料に60%前後使用されているとうもろこしの代替が充分可能で飼料中のオレイン酸成分を向上させ、リノール酸成分を減少させるので家畜がより健康に育ちます。しかも籾のまま給餌できるので玄米より20%歩留まりが向上します。\*主食用への転用防止にも好都合となります。
- 2、減反、遊休水田で栽培するので既存の稲作用農機具をそのまま活用でき、低経費で生産できます。\*水田の有効活用と主食用米の生産調整にも有効に連動できます。
- 3 畜産堆肥を大量に施用すると殺虫・殺菌農薬なしで主食米の2倍以上の収量増が実現可能なので主食米の6割以下の低経費で安全性の高い飼料米生産が可能となります。深水管理が出来る水田では除草農薬も不要、化学合成農薬0で超多収できることが実証されているので、より一層の低経費生産、安全性の向上が実現できます。
- 4、畜産堆肥の投入は、畜産排出物を資源化して循環型地域農業を前進させ、その上CO2を削減させて地球温暖化防止に貢献することが実証されています。
- 5 食料自給率を確実に向上させます。減反水田115万haの80%に超多収飼料米を作付けできれば900万t以上の飼料米が生産され、食料自給率が4%向上します。稲藁の粗飼料への活用を加えると合わせて5%以上の食料自給率向上効果が見込めます。

6、超多収飼料米が転作田で本格全面生産されると現在米国に払っているとうもろこし代金3,000~4,000億円が全国の稲作農家に還流します。しかも稲藁の粗飼料やバイオエタノール向けが2,000~3,000億見込めるので計6,000億円相当が稲作農家の収入増となり、全国の地域農業の再生に確実に貢献できます。

7、以上の飼料米を活かす日本型循環畜産生産システムは、アジアモンスーン地帯に共通して活用できるので東アジア地域全体の食料自給率と畜産飼料の安全性を向上させ、循環型地域農業推進による環境保全や水田のダム機能維持にも大きく貢献できると考えられます。従って大多数の消費者は超多収飼料米の本格生産を熱烈に期待します。

\* 消費者の全面支持 畜産生産者が超多収飼料米を家畜に給餌 稲作生産者が減反水田で超多収飼料米の本格全面生産推進に到る図式になります。

上記関連図式の円滑な推進には飼料米生産を奨励する、「水田利活用自給力向上事業」を5年間持続的に充実させ、環境保全効果が実証されている畜産堆肥の水田への施用を助成する「\_\_\_\_\_事業」と有効に連動させることが不可欠と考えます。

この仕組みが有効に機能すると飼料米を給餌した畜産生産物の割高感がなくなり、消費者は安全性の高い飼料米で育った国産畜産物の消費を広げ、飼料米の本格生産を促進させる好循環の形成に貢献できると考えます。

2010年1月23日 超多収穫米普及連絡会共同代表

上原公子(前国立市長)、清水鳩子(主婦連参与)、石澤直士(全鶏会議副会長)

上記文章を下記のように要約して図柄や漫画で表現して裏面を飾ります。

裏頁

飼料米を活かす日本型循環畜産の隠れた牽引力 畜産発酵堆肥と粃米給餌です！！

畜産発酵堆肥を投入して栽培された飼料米を粃米で給餌する優位性が注目されています。

1、収穫段階での立毛・天日乾燥、常温貯蔵可で玄米給餌より20%飼料の量が増加し、乾燥、脱穀の経費が削減され、貯蔵経費も削減できるので経費削減効果が高くなります。

2、種子消毒、殺虫・殺菌農薬不使用の飼料米を粃米で給餌するのでオレイン酸成分増加効果との相乗で家畜が一層丈夫に生育します。採卵鶏での産卵成績の向上が実証されています。(ときわ養鶏、東京農業大学畜産マネジメント研究室等)

3、健康な家畜の鶏卵や肉製品の安全性が向上します。

4、鶏卵や鶏肉、豚肉の栄養成分と食味の向上も実証されています。オレイン酸成分向上による健康志向、グルタミン酸成分向上によるすっきりとした味わいの食感等。

5、主食用米への混入を防ぐ為の分別流通を実施する上でも効果的です。

以上、飼料米を活かす日本型循環畜産の優位性が実証されていますが、現時点では、超多収、超低経費生産システムが全国に浸透していません。飼料米を活かす日本型循環畜産を本格軌道に乗せる上で飼料米育ちの畜産酪農製品の消費拡大が決定的に重要です。全国レベルで超多収・超低経費生産システムが浸透するまでの期間(5年程度)、水田利活用自給力向上事業と「CO2削減畜産堆肥投入奨励制度」を連動させた畜産堆肥投入飼料米本格生産奨励制度が確立されて維持されれば飼料米育ちの畜産酪農製品が割高感がなくなり消費拡大が持続して飼料米を活かす日本型循環畜産が本各軌道に乗ると考えられます。